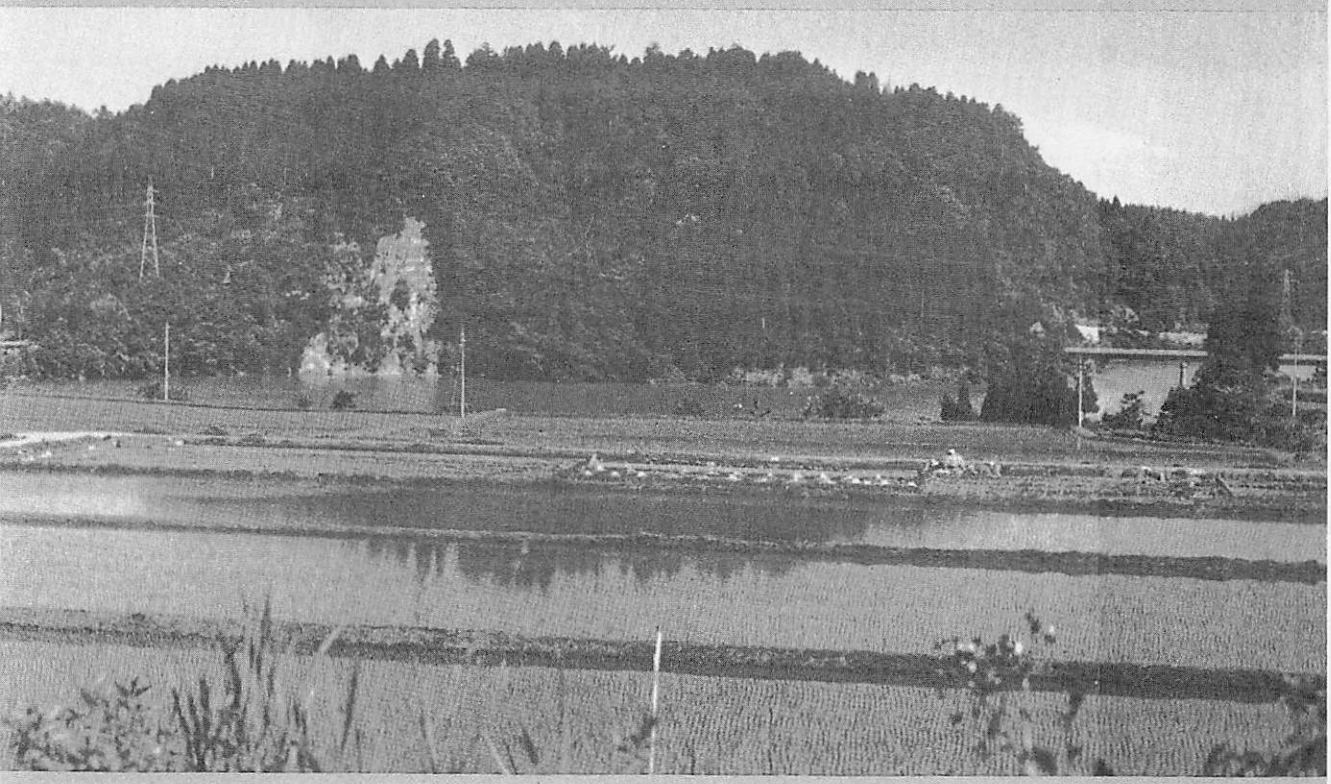
富山県指定史跡

増山城跡調査中間報告書



昭和62年10月

砺波郷土資料館
砺波市立砺波散村地域研究所
増山城跡調査グループ

例言

1　本書は、富山県指定史跡増山城跡を中心とした一帯の調査事業に伴う中間報告書である。

2　調査は、砺波郷土資料館が企画し、砺波散村地域研究所の協力により、次の三名によって構成する増山城跡調査グループが中心となり、『土蔵友の会』会員らの支援を得て実施したものである。

○増山城跡調査グループ

高岡　徹（越中史壇会会員）

西井龍儀（富山考古学会会員）

安念幹倫（　〃　）

3　本書の執筆は、右の三名が分担執筆し、文末に各執筆者の氏名を明記した。また、本書の編集は高岡　徹が行った。

4　調査の全期間を通じ、地元増山の安カ川甚治・土倉祐孝の両氏から貴重な御教示を得た。また、富山考古学会会員の久々忠義氏には、「鐘撞堂」付近の測量の際、御協力を得た。なお本書のワープロ打ちについては、老松邦雄氏の御協力を得た。ここに記して、感謝の意を表します。

5　増山城跡及びその周辺一帯の調査はまだ緒についたばかりであり、昭和六十四年度に刊行予定の報告書にすべての成果が集約される。今回の中間報告書は、その最終報告書作成に至る一つの過程であり、今後の調査に向けての基礎資料となるべきものである。

目　次

一　はじめに――調査の趣旨及び目的―― …… 1
二　調査の経過 …… 2
三　歴史的環境 …… 4
四　文献史料から見た増山城とその性格 …… 7
五　増山城の構造とその特色 …… 16
六　「鐘撞堂」について――実測調査から―― …… 22
七　遺物について …… 24
八　「神水鉢」について …… 26
九　おわりに …… 28

一　はじめに――調査の趣旨及び目的――

増山城は従来、松倉城・守山城と並び「越中三大山城」の一つと言われながら、その縄張や構造などについて、ほとんど十分な調査がなされぬまま、公園化等の整備が行われてきた。

今後もこのような状態で公園化が進められるなら、山中に残る貴重な遺構もいつしか失われかねない。今はまず城の縄張等を本格的に調査し、城郭の実態を解明することが急務であると考えられる。

城跡の実態が解明された上で、初めて今後の保存活用対策が講ぜられるのである。本調査は以上の認識に立ち、増山城跡の実態をその周辺関連遺構も含め三カ年にわたって調査し、その成果によって今後の城跡の保存と活用を図ろうとするものである。正式報告書は、昭和六十四年度の刊行を予定しているが、今回は昭和六十二年度に行った調査の成果をそれに先立って「中間報告書」として刊行することとした。

本報告書が一人でも多くの人々に、ふるさとの史跡・増山城の価値を再認識していただく上で役立てば、幸いである。

なお、増山城跡の調査計画を示せば、左記のとおりである。

◎昭和六十二年度

①増山城の城域を確定し、その縄張図を作成する。これによって、各郭の位置関係や構造、さらには特徴を把握し、城郭としての評価を行う。

②増山城に関する文献史料を調査し、歴史的な位置づけを行う。

③城跡一帯の伝承、地名、地籍図などを調査する。

④城跡から採集された遺物の分析を行う。

⑤一部の主要遺構について、実測図を作成する。

⑥中間報告書を刊行する。

◎昭和六十三年度

①亀山城、安川城など周辺諸城砦の調査を行い、増山城との有機的関連性を追究する。

②主要遺構の実測図を作成する。

③部分的な発掘調査を実施し、実態の解明をはかる。

④城下町跡の伝承、地名、地籍図などを調査する。

⑤城下に存在した寺院を調査する。

◎昭和六十四年度

①過去二年間の補足調査の実施。

②調査結果を集大成し、増山城とその周辺一帯の歴史的評価を行い、調査報告書を刊行する。（高岡）

二　調査の経過

①昭和六十二年三月二十一日（土）……通称「一ノ丸」「二ノ丸」など、山上一帯の主要な郭跡を踏査し、略測を行う。「一ノ丸」から「無常」にかけて中腹に腰郭や帯郭がめぐらされていることを知る。また、城域外縁部に規模の大きい竪堀が存在することも判明した。各郭、空堀共に規模壮大であり、砺波地方随一の山城であることを再認識する。

※調査参加者　計二十名

高岡　徹・西井龍儀・安念幹倫（以上、主任調査員）・河合久則・安カ川甚治・土倉祐孝・堀田多聞・中田昌志・高木美奈子・砂田麗子・武部孝則・川辺哲郎・早苗静子・田中直子・安カ川恵子・樽谷雅好・宮脇逸郎・出村　忍・貝渕文夫・白江秋広

②同年三月二十二日（日）……調査員を便宜上、A・B二班に分ける。A班（高岡・安念ほか）は前日に引き続き、縄張調査を行い、尾根筋・谷間を踏査する。B班（西井ほか）は二カ所で断面図の作成を行う。この日の縄張調査で、南側の竪堀が二つの谷間を横切る長大なものであることが判明し、興奮を覚える。

※調査参加者　計十三名

高岡　徹・西井龍儀・安念幹倫（以上、主任調査員）・安カ川甚治・土倉祐孝・金子宰大・小西竹文・出村　忍・安カ川恵子・田中直子・舘　明・白江秋広・藤井五月

③同年四月十二日（日）……調査の能率化をはかるため再度A・B二班編成で作業を進める。A班（高岡・安念ほか）は東大手口（仮称）周辺の縄張、さらに各空堀の位置関係を調べ、通称「御所山」・「中尾骨」・「長尾山」・「七ッ尾山」などを踏査する。「七ッ尾山」井戸跡付近では土塁に囲まれた遺構を確認する。一方、B班（西井・久々ほか）は鐘撞堂跡の実測図を作成する。

※調査参加者　計十一名

高岡　徹・西井龍儀・安念幹倫・久々忠義（以上、主任調査員）・土倉祐孝・今井六郎・堀田多聞・安カ川恵子・田中直子・高木美奈子・般林雅子

④同年五月十七日（日）……増山城の特徴の一つである竪堀の実態をつかむため、竪堀の堀底を全域にわた

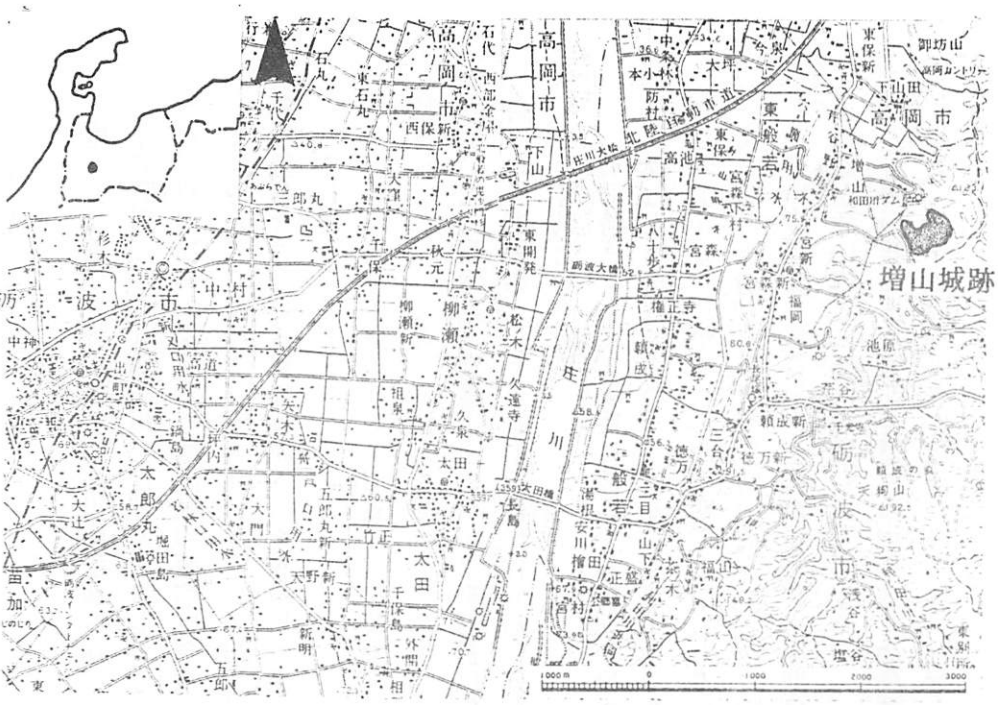


図１　　位　置　図

って踏破し、総延長を計測する。この日、朝より雨激しく降り、全員ズブ濡れの中、斜面を登り降りする。すでに草が繁り、調査も困難を極める。

※調査参加者　計六名

高岡　徹（主任調査員）・土倉祐孝・中田昌志・老松邦雄・老松久美子・白江秋広

⑤同年六月二十日（土）……砺波郷土資料館において調査打合せ会を開催する。三月以来の調査結果が報告され、八月頃の中間報告書刊行が決定する。また、秋以降の調査計画についても打ち合わせる。

⑥同年九月五日（土）……高岡・白江の二名で、「又兵衛清水」・「御所山」・「中尾骨」などを踏査する。「中尾骨」の西北部で小規模な堀切遺構一カ所を確認する。草木が繁り、十分な調査は困難。下山後、高岡・安カ川・土倉の三名で城下町から山上にかけての地名等の調査について打ち合わせる。

⑦同年九月七日（月）……高岡・西井・安念の三名で、これまでの調査内容の検討を行い、秋に刊行を予定する中間報告書について打ち合わせる。

（高岡）

三　歴史的環境

増山城は砺波平野の東部、庄川中流域右岸に形成された芹谷野段丘から、和田川をはさんだ東側の庄東山地にある。和田川ダムに面した増山城の西側は急峻な崖となっているが、これはここから北にひろがる射水丘陵の地質基盤となっている青井谷泥岩層を和田川が深く抉りこんでできたものである。

芹谷野段丘や庄東山地では旧石器時代後期の石器が発見されており、このころにはすでに人々の生活の場となっていた。高沢島Ⅰ遺跡出土のナイフ形石器は約二万年前、芹谷遺跡出土のナイフ形石器や槍先形尖頭器は約一・五万年前とみられる。

旧石器時代から縄文時代に移行する時期の槍先形尖頭器が福山大堤から見つかっている。単独発見であり、他にどのような石器が伴うのか不明のところも多い。縄文時代前期の遺物も芹谷遺跡や増山遺跡から断片的な出土をみている程度である。ところが縄文時代中期になると遺跡数が急に増え、その規模も大きくなる。

芹谷野段丘にある厳照寺遺跡は中期前半の集落であり、昭和五十一年の発掘調査では十一棟の竪穴住居と多くの遺構や遺物が検出された。同時期の遺跡は宮森新北島Ⅰ、高沢島Ⅱ、上和田にもある。中期後半から後期、晩期の遺跡はまた少なくなる。徳万・安川地内から後期初頭の土器が採集されており、上和田遺跡では晩期の中屋式期の土器が出土している。庄東山地では御物石器が出土した中尾遺跡や石刀の出土した東別所遺跡があり、いずれも晩期に近い時期が与えられる。

弥生時代から古墳時代にかけては、庄東山地、芹谷野段丘のいずれにあっても全く不明である。和田川の深い谷や、砺波平野と比高差の大きい芹谷野段丘が初期農耕の適地とはいえないにしても、射水丘陵北端の遺跡の在り方からみれば、その周辺部にもう少し該期の遺跡があってもよい筈である。そんな中で増山城の通称「二ノ丸」に近い「又兵衛清水」脇から発見された一片の土師質土器は、古式土師器の可能性があり、発見位置やその所属年代で大きい意味をもつ。空白部分のひとつの手がかりとなるかもしれない。

奈良時代になると芹谷野段丘やその段丘裾、さらに庄東山地へと遺跡の分布範囲は広がる。段丘西側斜面にある宮新窯は八世紀前半の須恵器窯であり、段丘東側斜面の増山窯は八～九世紀、和田川を越えて増山城の南にあ

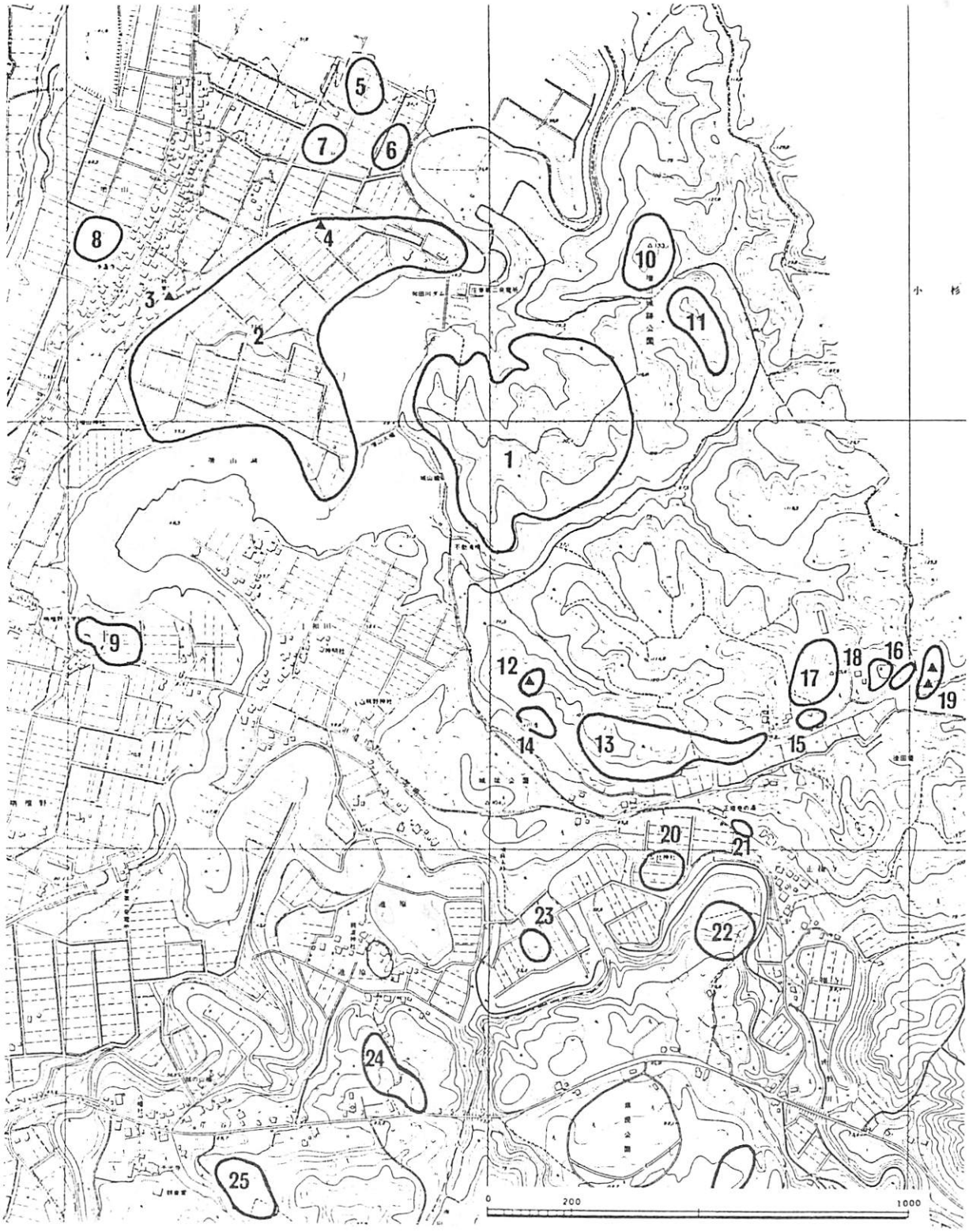


図２　　増山城周辺の遺跡分布図

1 増山城跡　2 増山遺跡（縄文中・後期、奈良、中・近世）　3 増山窯跡（奈良・平安）　4 増山窯跡NO.2（奈良・平安）
5～7 高沢島Ⅰ～Ⅲ遺跡（旧石器、縄文前・中期、奈良・平安）　8 （不明）　9 上和田遺跡（縄文中・晩期）
10 亀山城跡（中世）　11 七ツ尾遺跡（中世）　12 団子地窯跡（奈良）　13～16 増山製鉄遺跡群（奈良・平安）
17 正権寺遺跡（縄文）　18 小丸山遺跡（旧石器？）　19 小丸山窯跡（平安）　20 正権寺五社神社（中世？礎石）
21 前山遺跡（平安）　22 般若遺跡（縄文中期）　23 丸山古墳　24 池原遺跡（旧石器、縄文中期）
25 芹谷遺跡（旧石器、縄文前・中期、奈良・平安）

る団子地窯は八世紀後半、さらに段丘南端近くの丘陵にある福山赤坂窯が八世紀後半など、この時期に須恵器生産の最盛期となる。これに相応して集落遺跡も段丘上の宮新、高沢島Ⅱ、高沢島Ⅲ遺跡のほか、段丘裾の安川遺跡など庄東地域全体にわたっている。これはこの地域が八世紀になって急速に開発が進められたことや、天平宝字三年（七五九）及び神護景雲元年（七六七）の東大寺開田地図や、墾田地図の井山、伊加留伎、石粟の三庄が庄東地域に比定されていることとも関連する。

また、最近増山地内の金クソ山周辺では、十基を越える炭焼窯と製鉄跡にかかわる大量の炉壁や鉄滓散布地が発見された。炭焼窯は地下式のものがあり古い形式を示すが、古代鉄生産が盛んであった射水丘陵の状況からみて、八～九世紀にかかる一大製鉄遺跡群であろう。この谷奥には射水郡と婦負郡の境界に接して九世紀代の須恵器窯である小丸山窯がある。このように須恵器や鉄など古代生産遺跡が増山地内に集中することは生産環境にかなっていたこともあろうが、その生産を促進せしめた郡司層の存在も推察されるところである。

池ノ原には延喜式の式内社に比定されている荊波神社がある。荊波神社は他にも比定地があり、いずれとも決め難いが、奈良時代から平安時代にかかる集落跡や、生産遺跡が増山周辺に多いことから、当地である背景は揃っている。

寿永二年（一一八三）、木曾義仲が京への進攻の際、般若野で平氏の先遣隊長平盛俊を敗走させ、後世に語りつがれる倶利伽羅山の戦いへとならしめた般若野は、平安時代末に徳大寺家の庄園となった般若野庄と同域と考えられている。

芹谷の千光寺は大宝三年（七〇三）草創の寺伝があり、本尊の聖観音菩薩像は白鳳様式の金銅像である。また、安川の薬勝寺は延文四年（一三五九）開山と伝え、境内には宝篋印塔をのせる親王塚がある。近くには公卿塚（九人塚）もあり、いずれも城主神保氏と関わる伝承をもつ中世の塚である。

中世の遺跡は、五輪塔や板碑などの石塔類が般若野庄域に集中的に分布することに加え、珠洲古陶も同域から多く発見されていることからも伺える。

（西井）

四　文献史料から見た増山城とその性格

増山城は位置的に越中西部、特に砺波地方の歴史と深い関わりを有した城として知られる。その歴史は、南北朝期から近世の初めに至る、約二百五十年にも及ぶ長期のものである。越中国内でこれに匹敵する歴史を持つ城としては、（富山城を除外すれば）越後国境の宮崎城、椎名・上杉氏の松倉城、飛騨口の城生城（斎藤氏）、射水郡の守山城（神保・前田氏）などであろう。とりわけ、増山城と並び越中三大山城と称される松倉城や守山城がいずれもこの中に含まれるのは、注目に価する。以下、この増山城の歴史を文献史料の上からたどり、その性格を浮きぼりにしてみたい。

城の創築年代がいつ頃であったのか、このことを明確に示す史料は残されていない。しかし、貞治二年（一三六三）六月の二宮円阿軍忠状[1]はそのことを考える一つの手がかりとなる。それによると、前年、二宮氏は加越国境の松根から七月三日和田合戦に従軍し、庄城や野尻をめぐり、十一月から翌貞治二年の三月まで和田城を警固し、忠節を尽くしたという。

二宮氏は元越中守護桃井直常の討伐に従軍を命じられたのであるが、この軍忠状に見える「和田城」について、森田柿園はその著『越中志徴』の中で、「考ふるに、和田城と云は、今云増山城なるべし」と述べている。森田柿園がその根拠としたのは、おそらくこの付近一帯をかつて上和田村・中和田村・下和田村と称したという伝えからであろう。すなわち、『越中志徴』上和田村の項に、「郷村名義抄に、増山村・下山田村は、昔は中和田村・下和田村と申候。神保宗次郎城築之刻、中和田村は増山村、下和田村は下山田村と改候由申伝とあり。去ば往古上和田・中和田・下和田とて、此三村は元和田と称し、一村なるべし」と記され、現増山村が古くは中和田村と称し、神保氏時代に改称したことを伝えている。

こうした地名とは別に、前掲軍忠状に登場する城名を見ていくと、松根・庄城・鴨城・頭高城（現高岡市頭川か）と、ほとんどが砺波平野を見下ろす山上に位置していることに気づく。すなわち、この時期に桃井方が拠点とし、戦闘が行われたのは、主にこのような場所に築かれた城砦群であった。これらの点から見て、現在の増山城一帯が南北朝期の「和田城」にあたることは、ほぼ間違いないと思われる。

とは言え、こうした点を根拠に、直ちに「和田城」を

現在の増山城にあてることは危険であろう。実は、増山城北東の尾根続きには、直線距離で約七五〇mを隔て、「亀山城」と呼ばれる別の山城跡が一カ所存在する。この山は増山城よりも標高が高く、周囲も急斜面となった要害である。規模は増山城と比べるには小さすぎるが、南北朝期の「和田城」であった可能性もある。たとえば『越中砺波射水両御郡古城等覚書』などが増山城の城名の由来を「亀山之城より増タルヨシニテ増山と名付ル」としているのは、亀山城が増山城よりも古い城であるとの伝承を伝えているのであろう。こうした伝承の検討も含め、詳細は今後の課題としなければならない。

なお、前掲の軍忠状では、二宮氏が康安二年七月、和田合戦で忠節を尽くし、同年十一月より翌年三月まで和田城を警固したとある。このことは、和田城がそれまで桃井方の拠点だったこと、そして七月の同城付近での合戦によって城が幕府方の手に落ちたことを物語るのであろう。また、二宮氏がその後和田城の警固を行っているのは、同城がこの砺波地域における一連の戦いの中で、継続的に確保しておかねばならない要衝であったことを示している。以上の点から、和田城は康安二年頃、桃井直常方によって砺波地方の一軍事拠点として築かれたことが推測できるのである。

このののち、増山城の歴史にはしばらく史料上の空白時期が存在するが、戦国期を迎えると神保氏の主要な居城の一つとして登場する。神保氏は、室町・戦国期に越中守護畠山氏の守護代として、婦負・射水二郡に大きな勢力を有したが、神保氏が初めてこの増山城に拠った時期については、必ずしも明らかではない。しかし、守護代としての神保氏の史料上の初見が嘉吉三年（一四四三）であること[2]を考慮し、ここでは一応十五世紀後半頃と推測しておきたい。

永正三年（一五〇六）、一向一揆が越中を制圧すると、越中の国人衆は、越後守護代長尾能景を頼った。能景は越中衆を援助して反攻に転じ、同年越中へ進攻した。神保慶宗・遊佐慶親らの守護方は八月十八日、婦負郡寒江蓮台寺で一揆方と戦い、続いて九月十九日には増山城に近い芹谷で戦いが繰り広げられた。戦線が次第に西の砺波郡境へ移ったのは、一揆方が長尾勢らによって軍事的な圧迫を受けたからであるが、越後勢の総帥であった長尾能景はこの芹谷の戦いで討死をとげてしまう。それはのちの永正十六年（一五一九）に能景の子為景が「畢竟神保所行訖（迄）候」と述べている[3]ように、越中守護畠

山氏以下の、とりわけ神保慶宗の軍事的非協力によるものであったという。ともかく、この時の能景の討死によって越後勢は敗北を喫し、砺波郡の守護代であった遊佐慶親も越後勢と共に春日山へ逃れるに至った。

ところで、この時の戦いが芹谷で行われたのは、なぜか。それは、この付近が婦負郡北部から砺波郡へ進攻する際の要衝だったからであろう。当然、軍事拠点としての増山城も存在したはずであり、そこは先にも推測したように、十五世紀後半以降、守護代神保氏の支城として機能していたとみられる。ついでに言えば、慶宗時代の神保氏は日本海に臨む放生津城を本拠とし、支城としては二上城やこの増山城などの山城を有していたとみられる。その神保慶宗の支城である増山城外で戦いが行われ、神保氏の非協力によって長尾能景が討死したのである。為景がのちの永正十六年に父の仇討を大義名分として越中に出兵した背景も、実はそこにあったと言える。

さて、長尾為景は永正十二年（一五一五）に加賀の一向一揆討伐を目的として越中へ進攻したが、越中勢の反撃によって退けられた。同十六年には、前述のように神保慶宗討伐を名目として越中へ進攻し、神保方の二上城を落城寸前にまで追い込んだが、最終的に攻撃は成功せず、いったん越後へ帰陣する。しかし、翌十七年の進攻では、十二月の新庄の戦いで神保方が敗れ、慶宗は西方へ逃れる途上において自害して果てた。この結果、放生津神保氏は滅亡し、大永元年（一五二一）には守護畠山尚順が為景に年来の越中出陣を謝し、新川郡守護代職を与えるに至った。

一方、慶宗の後継者とみられる長職は、その後次第に神保氏の再興を進め、従来の勢力圏であった射水・婦負二郡を固めると共に、天文十二年（一五四三）頃には新川郡に進出して、富山に築城する。長職の支配力はこののち永禄初期にかけて最盛期を迎え、富山を本城として池田・富崎・火宮・増山・守山などの各地に支城を設けた[4]。長職のこの時期の支城網の中で、増山城は特に西方の砺波郡に向けて設けられた支城として位置づけられる。

さて、神保氏のこのような隆盛は新川郡の椎名氏を圧迫する勢いを示したため、永禄三年（一五六〇）には椎名氏を支援する長尾景虎が越中へ進攻し、神保氏を攻撃した。この時の模様を伝える同年四月二十八日付けの景虎書状には、「去月（三月）廿六日、不図越中国出馬候処、同晦夜中、神保在城号富山地、自落、彼国西郡号増山地利へ相移候条、則越中国味方衆雖指向候、増山之事

元来嶮難之地、人衆以相当、如何ニも手堅相抱候間、各見除、于今引除陣申候間、景虎取越大河ノ切処、向増山、及近陣可相攻分候処、其夜半神保落行、武具乗馬已下棄之、不知行方体候」と述べられている。[5]

すなわち、三月二十六日越中に出兵し、神保長職の在城する富山城を攻めたところ、同月晦夜中に長職は城を捨てて増山城へ移った。そこで長尾方の越中衆を指し向けたが、増山は元来「嶮難之地」で、守備の人数も多く、守りも堅固なため、攻撃を手控え、陣を引いてしまった。このため、景虎自ら大河を越え、増山城の近くに陣を布き、攻めようとしたところ、その夜半になって、長職は武具や乗馬などを打ち捨て、城を落ちのび、行方をくらましたという。

こうして、長職は居城を追われたのだが、実際には越後勢の撤退後、まもなく失地の大半を回復したらしく、七月には早くも婦負郡北田井（現富山市北代）の極楽寺に禁制を下している。しかし、二年後の永禄五年、越中に進攻した上杉輝虎（関東管領となって改名）は呉福山（現富山市城山）にたてこもる長職を包囲し、長職は能登守護畠山義綱を頼って降伏した。[6]このような軍事的敗北にもかかわらず、長職は再び旧領を回復したとみられるが、それは多分に制約を加えられたものであり、史料上から見ても富山城の回復はなされなかったと推測される。恐らく、長職はこののち、その本拠を増山城に移したのではないかとみられる。この時期の長職の増山居城については、（永禄十一年）九月十二日付けの椎名氏被官胤珍覚書に「一、甲・信并増山和与候て、ひかし郡内御しんたい（進退）なされ候へハ、越中ハ皆御さくはいも不罷成候哉、可有御分別之事」（傍点、筆者）[7]とあることからも明らかである。「増山」が神保長職を指すことは言うまでもない。椎名氏はこの時点で、上杉方に属する飛騨武将牛丸備前守に上杉方への謀叛を説き、神保氏にも反上杉方への参加を働きかけたのであった。

次の史料は、この年十月頃、長職が一向一揆方に対し攻撃を加えていたことを具体的に示すものである。

尚々御門徒衆被御相談馳走専一候、かしく、
急度一筆遣候、仍西条へ増山衆就打入各武者たち、河ふちを被相拘之由候、其庄（五位庄）之儀、申合西条へ合力専用候、年寄共かたへ雖可申遣候、各覚悟難測候之条、両人以談合御門徒衆申合馳走肝要候、恐々謹言、

十月十九日　　顕栄（花押）

長光寺御房

進之候[8]

これは、勝興寺顕栄が「増山衆」すなわち神保方の西条（現高岡市南西部小矢部川流域）打ち入りに対し、五位庄（現福岡町を中心に一部高岡市にかかる地域）の門徒を結集して対処するよう求めたものである。

ところで、こうした状況の中で、神保父子の間で対立が生じ[9]、それは翌十二年十一月十三日付けの北条氏康書状に「神保家中造意有之付而……」[10]とあるように、家中内紛へと発展した。

ところで、元亀三年（一五七二）五月には、加賀の一向一揆が越中に入り、北陸道を東進する勢いを示した。このことを報じたのは、射水郡火宮城を守る小嶋職鎮・神保近江守らである。彼らはもともと長職の家臣達であったが、この時点では上杉方の最前線である火宮城を守っているのである。このことは、長職の死去とそれに引き続く一部家臣団の上杉方への編入を物語るのであろう。一揆方はこのあと火宮城を攻め落とし、富山城を占拠して上杉方と対峙する。それは同年六月のことである。恐らく増山城には、その後一揆方（反上杉方）に立つ神保勢が拠ったのであろう。それは神保家臣団の分裂を物語るものであった。このことは、富山城を包囲中の上杉謙信が、一部の一揆方の撤退を報じた九月十八日付けの書状に「又増山衆払陣共申候」と述べている[11]ことからも明らかである。富山城を占拠した一揆勢の中に「増山衆」と称される勢力がいたわけである。この「増山衆」の呼び名は、前掲永禄十一年の史料に見える「増山衆」に通ずるものであり、増山城に拠る神保勢を指すのであろう。

さて、富山城を占拠した一揆方は、最終的に天正元年（一五七三）頃には富山付近から駆逐されたとみられる。謙信はその後、越中国内の平定を進めるが、反上杉方の拠点であった増山城の攻略は天正四年（一五七六）八～九月頃とみられる。すなわち、同年九月八日付けの謙信書状に「椙尾・増山落居」[12]、また九月九日付けの七里頼周書状に「仍椙尾・増山落城」[13]などとあることにより明らかである。こうして、謙信は越中の制圧を達成し、能登へ進んだ。そして、増山城はこののち、上杉氏の越中西部における拠点になったとみられる。

増山城が上杉氏の支城として使われたのは、天正四年から九年（一五八一）頃にかけての期間であったとみられる。その間、城では上杉の部将吉江宗信などが守備についていたようである。このことは、（同九年）十一月

晦日付けの吉江宗信書状に「先年於増山之地御奉公申上付而……」[14]とあることより知られる。このように越後の上杉部将が直接越中の城を守備する例は、国境の宮崎城や松倉・魚津城などにもみられるが、いずれも軍事上の重要地に限られていることに注目すべきであろう。

ところで、謙信が天正六年三月に急死すると、織田方が越中に進出し、同八年頃までには国内の西半部をほぼ制圧するに至った。とは言え、全域が制圧されたわけではなく、いくつかの地域には依然として上杉方の、またはそれに通じる勢力の支配拠点があった。前述の木舟城や増山城などは、天正九年の半ば頃まで上杉勢が確保していたとみられる。同年五月十三日付けの上杉部将黒金景信の書状によれば、「増山なとも焼払、木舟計相抱之由申来候」とあり[15]、織田方が「増山」を焼き払い、上杉方は木舟城ばかりを維持していることが述べられている。恐らく、佐々成政ら織田勢の攻撃によって、増山城はこの時落城したのであろう。城郭をはじめ、城下の一部も焼かれたのかも知れない。同じ頃、越中西部のもう一つの上杉拠点であった木舟城には、吉江宗信らが籠城を続けていたが、七月に織田方の攻撃で落城し、海路越後へと退いている[16]。以後、増山城は木舟城と共に織田（佐々）方の拠点となるのである。

成政は敵対する国人や上杉勢を同十一年夏頃にはほぼ駆逐し、国内の統一を達成する。しかし、翌十二年（一五八四）の小牧・長久手の戦いでは織田信雄・徳川家康と結んで秀吉に敵対し、秀吉方に立つ加賀・能登の前田利家と戦いを交えた。この越中西部の戦いは、増山城の重要性を大いに高めたとみられる。佐々方にとって、増山城は、加賀から進攻した敵が佐々方の本城である富山城へ進むのを阻止するにふさわしい山城であった。佐々方が増山城を守ったのは、秀吉の軍勢が越中へ進攻した同十三年八月までである。この間、成政が増山城の修築につとめていたことは、同年七月五日付けの前田利家書状に、成政が加賀鳥越付近に攻め込み、そのあと増山の普請を行っていると述べられていることからも明らかである。恐らく上方勢の来攻が近いことを予期し、富山城の西の守りとしての備えを固めるためであったのだろう。しかし、佐々方にとって増山城の修築は、この時が初めてではなく、前年（天正十二年）の加越国境での交戦以来、機を見て行われていたはずである。

増山城が佐々方の有力な支城であったことは、天正十三年閏八月一日付けの秀吉書状に「仍当表事、越中倶利

加羅峠ニ馬を立、先勢東ハ立山うはたう（姥堂）・つるき（剣）の山の麓迄令放火候所ニ、木船・守山・増山以下所々敗北候ニ付て内蔵助令降参……」と述べられていることからもわかる。[17]この時点で、増山城は木船・守山と並んで越中西部の代表的な支城とみなされていたのである。

さて、成政はこの城にどのような部将を配置したのか。『末森記』によれば、「成政馬廻り替々番勢に被入置」とあって、直属の馬廻りを交替で在番させていたという。また、『寛永諸家系図伝』では、養子の佐々源六（勝之）を「升山の城」に置いたと伝える。さらに「石原所左衛門由緒帳」（『越中志徴』所収）によると、重臣佐々平左衛門の子小太郎（知行四千石）が若年ながら増山城を預かったが、のち牢人となり、そのあとを平左衛門が預かったという。馬廻りにせよ、佐々源六にせよ、同平左衛門にせよ、成政は自らの精鋭を増山城に配置したと言ってよい。それは、成政が増山城をいかに重視していたかを物語る。

成政はしかし、同十三年八月の上方勢進攻の直前に、増山城などの支城から守備兵力を引き揚げ、富山城に集結させたものの、ついに戦うことなく、秀吉の軍門に降った。秀吉はこの戦後処理として、成政には新川一郡のみを安堵し、婦負・射水・砺波三郡は前田利勝に与えた。利勝は射水郡の守山城に入り、増山城はその支城となるに至る。『三州志』によれば、「依りて国祖（利家）山崎庄兵衛・中川清六をして城を守らしむ」とあり、前田氏の重臣山崎庄兵衛（長徳）・中川清六（光重）がこの城を守ったという。前田氏がこのような重臣クラスを配置したこと自体、依然として増山城が越中国内で重視されていたことを示している。

前田氏が越中の西部を領有した翌年（天正十四年）、上杉景勝が上洛の途上、越中国内を通過した。この時、増山城の守将であった中川清六が中田において一行を接待している。また、文禄二年（一五九三）十月、中川光重の夫人（前田利家の娘蕭姫）は砺波郡福田惣社に祈願状を与えたが、その中で「ますやまさいしゃう」と署名している。[18]このことは、中川氏が引き続き増山城に居城していたことを示すものである。

ところで、戦国時代より城郭が営まれた増山に城下町が形成されたのは、いつ頃なのか。今、それを明らかにする史料はないが、文禄五年（一五九六）四月十日付けで利長が発した申定状には「一　増山・中田・栃（放）

生津、其外在々所々ニ有之ひ物し（檜物師）、一統ニ京都之番可相勤、……」とあって[19]、増山に檜物師が存在したことがわかる。このことは、当時、城郭がまだ存在し、城下町も栄えていたことを示すのであろう。しかし、城下町の実態について記した史料が、今のところ、これ以外にないのは惜しまれる。

さて、（慶長十年）十一月二十二日付けで、増山城主中川光重夫人が千光寺に対し、「しめのえん」寄進につき断り状を与えている。この中に「ますやま城より」[20]と記されていることから、この時点での増山城の存在を確認できる。こののち、増山城がいつ頃まで存続したのか、明確な史料は残されていない。しかし、中川光重が同十六年（一六一一）に退老し、宗半または巨海斉と号していること、そして同十九年（一六一四）に五十三歳で死去していること[21]からすれば、この慶長十九年からさほど遠くない時点に廃城になったものとみて、まず間違いはないであろう。『越中古城記』に「中川宗半ハ於此城卒去ニ付金剛寺村恩光寺ニ葬ル由……」（傍点、筆者）とあるのは、そのことを裏付けるものである。

註

1 二宮文書
2 嘉吉三年十二月二十七日付け守護奉行人連署奉書案に神保備中守（国宗）の名が見える（徳大寺家文書）。
3 （永正十六年）二月二日付け長尾為景書状（上杉家文書）
4 高岡　徹「城館研究の視点（二）　――神保氏の城館配置と領域支配――」（『富山史壇』77号）参照
5 福王寺文書
6 （永禄五年）十月二十七日付け上杉輝虎書状（乙川忠栄次所蔵文書）
7 秋田藩採集古文書
8 長光寺文書
9 （永禄十一年）七月二十九日付けの織田信長書状に「神保父子間、及鉾楯之旨候」とある（志賀槙太郎所蔵文書）。
10 上杉家文書
11 同右
12 同右

13 吉江文書
14 同右
15 歴代古案別本
16 （天正九年）七月十七日付け吉江宗信書状（上杉家文書）
17 北徴遺文
18 「ますやま（増山）さいしゃう」は、これまで前田利長を指すとみられてきた（『富山県史』史料編Ⅲ・近世上など）が、最近の調べで中川光重夫人（蕭姫）であることが判明した（金竜教英氏の御教示による）。
19 上埜十右衛門氏所蔵文書
20 金子文書
21 加賀藩史稿

（高岡）

五　増山城の構造とその特色

増山城は和田川右岸の山上（標高一二〇m）に築かれた山城で、西麓から北麓にかけて和田川が蛇行して流れる。特に西側は急斜面の要害である。一方、南から東方にかけては深い谷間が入り込み、天然の大空堀を形成してこの方面からの攻撃を阻んでいる。結局、山続きとなっているのは東北方だけであり、尾根伝いに北方の亀山城方面へと連絡が可能である。

増山城の要害堅固な守りは、すでに前節で述べたように、（永禄三年）四月二十八日付けの長尾景虎書状の中に言及されている。すなわち、「増山之事、元来嶮難之地、人衆以相当、如何ニも手堅相抱候間……」とあって、神保氏の持城であった同城の要害堅固な様子が長尾方によく知られていたことがわかる。

『越中四郡古城跡略記』は、長尾勢がこの城を攻めたが、なかなか落ちなかった理由として、城の背後に婦負郡の長沢へ抜ける道があり、そこから兵粮を運び入れていたため、城方が困難に陥ることはなかったと伝えている。城内にはまた、湧水が豊富に得られ、池などもあり、飲料水にも不自由しなかったと思われる。このように、前面に和田川という天然の水堀、そして背後に深い天然の空堀をめぐらし、内部に湧水等の得られるこの城は、実に中世の山城にふさわしい地の利を備えていると言っても過言ではない。

ところで、今回の調査によって知られた増山城の縄張は、別図のとおりである。限られた時間の中での調査によるものであり、若干の見落とし、誤認等もあるかもしれないが、それらは今後、逐次修正されていくべきものである。

①城域について

城郭としての増山城の範囲（城域）は、西の和田川べりを起点とし、南面から東面をめぐる空堀によって囲まれた地域、すなわち通称「七曲り」を登った西端のE郭から通称「御所山」の手前にあるD郭にかけての範囲とみなすことができる。

この他にも、御所山から東北方へ伸びた尾根伝いには、土塁や空堀で囲郭された遺構、井戸跡などが点在する。これらはしかし、前述のE～D郭間に見られる壮大な空堀や土塁などの遺構と比べ、規模・構造共に極めて簡素・単純なものであり、はっきりと一線を画している。なお検討を要すべき点を含むものの、これ

らは増山城に付属した一種の家臣団屋敷などの遺構とも考えられる。『砺波郡・射水郡・新川郡古城跡書上』に「城外ニ三拾間四方、五拾間四方ノ屋敷跡山続キニ数ケ所有之」（傍点、筆者）と記されているのは、そのことを指しているのであろう。

②主郭（本丸）について

増山城内の郭を便宜上、別図のようにA～K郭と呼ぶこととする。この内、規模や構造の上から主要な郭と考えられるものは、A郭（通称「一ノ丸」）・B郭（同「二ノ丸」）・C郭（同「安室屋敷（アンヂヤシキ）」）・D郭（同「三ノ丸」）の四郭である。この他の郭は、それらの補助的な支郭とみなせる。

さて、問題は主郭（いわゆる「本丸」）の位置である。その前に、現在通称で呼ばれている「一ノ丸」・「二ノ丸」等の呼び名について考えてみよう。これらの名称が一体いつの時点で形成されたものかは不明だが、少なくとも現在公図中にそれらの名称が付されているところを見れば、明治時代以降であろう。とすれば、それらが本来の戦国時代以来の名称を継承しているものとは言い難いのである。ここでは、今一度、原点に立ち戻り、位置や構造などから、本来の主郭（本丸）を推定してみたい。

山城の主郭の条件として、まず一般的に言えるのは城内の最高所を占めることである。最高所に立てば、たいていの場合、城内全域を見渡せ、各郭の指揮を取ることが可能だからである。（無論、例外もあって、たとえば最高所が極めて狭い平坦面しか得られないような時には、下の場所に移る場合もある。）増山城の場合、最高所を占めるのはB郭（通称「二ノ丸」）で、中でも東北角に位置する通称「鐘撞堂」が一番高い。

次に、高さと共に重要な条件として、一般的に城内の中央部を占めることである。これは、中枢部である主郭の防禦上、当然のことである。（この場合にも例外はあり、地形上の制約から、城内の中央部ではなく、一方に偏ることがある。）増山城の場合、前述のB郭が城内のほぼ中央部を占めている。防禦面からも、B郭は直接外部の敵から攻撃を受けにくい位置にある。これらの点は、別図の縄張図からも明らかである。

以上の二点とは別に、他のA・C・D三郭には見られない特徴がB郭にある。それは郭の出入口（虎口）が明瞭であること、そして郭の隅にあたる所に櫓台状の遺構が残ることである。B郭の虎口は郭の西方に開

けられ、しかも斜めに上がる坂道が取り付けられている。すなわち、攻撃側はここで側面をさらすことになり、さらに上から見下ろされるわけである。虎口のそば（郭の西南角）には、上部が約八ｍ四方の方形の櫓台状遺構が認められる。恐らく虎口を直接防禦するための施設であったとみられるが、虎口の守りをこれほど厳重に固めた郭は他には見られない。

また、郭の東北角に残る櫓台状の遺構も他に例を見ない大規模なものである。詳細は次節で述べるが、上部が東西一三ｍ、南北一二ｍ程度の方形を呈する。ここは三本の空堀がほぼ十字に交わる位置に面し、防禦上も重要な役割を果たしていたことが推測される。しかしそれにもまして、このような大規模な櫓台状施設が存在すること自体、Ｂ郭の特異性を物語るものに他ならない。このように、遺構面から見ても、Ｂ郭は城内で最も重要な性格を有していたことが知られるのであり、主郭である要素を十分に備えているとみられる。

では次に、過去の文献史料の中に主郭の位置を特定できるものがあるかどうかさぐってみよう。まず、規模の点から見ていこう。『越中古跡粗記』や『越中古城軍記』は、本丸を十四、五間（約二五～二七ｍ）四方とするが、このように小さな郭は、Ａ～Ｄ四郭の内にはない。また、『越中古城記』や『越中古城館址記』ａ[1]には、本丸を東西四十五間（約八一ｍ）、南北二十二間（約四〇ｍ）と記している。この規模にほぼ該当するのは、Ｂ郭のみである。『越登賀三州志』の方もこの数値を採用している。一方、『越中砺波射水両御郡古城等覚書』や『越中古城館址記』ｂでは、本丸を東西四十五、六間（約八一～八三ｍ）、南北七十四、五間（約一三三～一三五ｍ）とするが、東西はともかく、南北がこれほど長い郭はＡ～Ｄ郭の内には存在しない。この他、『宝暦十四年砺波郡古城跡山塚寺社古跡等書上申帳』、『城跡館跡由来申伝之趣書上申帳』、「増山古城間数写」（『金子文書』）では長さ五十間（約九〇ｍ）、幅二十四間（約四三ｍ）とするが、これに唯一近い規模を示すのはＢ郭である。

増山城本丸の規模について言及した史料は、これでほぼ尽きるかに見える。史料に記された長さは、測点をどこに求めたか不明であり、必ずしも単純な比較を行うことは困難である。しかし、おおよそＢ郭がＡ～Ｄ四郭中で最も本丸に適合した規模であることが知られよう。

最後に、文献史料の中に、規模以外で本丸を特定できる記述がないかさぐってみよう。郭の規模については記さないものの、各郭周辺の地形等を詳述する『越中四郡古城跡略記』によれば、本丸に清水があり、後の本丸土居の外に水たまり、芦生えの所があると記す。清水というのは、B郭の北西下にある現在の「又兵衛清水」、また水たまりというのは、現在のB郭東北下にある「馬洗池」を指しているとみられる。「本丸土居」とあるのは、現在の「鐘撞堂」から南に伸びている幅の広い土塁のことを指すのであろう。これによれば、本丸は現在のB郭にあたるとみてよい。

しかし、一方でB郭を明らかに「二ノ丸」とする史料もある。それは『三州志』が別の「一書」を引用し、「又二丸中に大石あり。方人旗台石と云ひ伝ふ」と述べている箇所である。ここにいう「大石」とは、現在B郭の西北部に存在する通称「手水鉢」のことであろう。が、『越中旧事記』は同じ石について「此城の本丸とおぼしき所に、手水鉢のごときなる石あり」と記し、石の置かれている郭を本丸と推測している。また、『越の下草』も「本丸に旗台に用へし石也とて、土より上三四尺斗、方三尺余の石あり。真中に円き穴あり。常に水ありて手水鉢の如し」と、この郭を本丸にあてている。この石の性格については、次節において詳しく述べるが、このような特殊な大石が存在すること自体、B郭の城内における特性を示すものとも言える。

以上、いろんな角度からながめてきたが、筆者としては、郭の城内に占める高さ、防禦上の位置、他と際立った虎口の守り、大規模な櫓台状施設の存在、そして文献史料に見える規模などから、B郭こそ増山城の主郭（本丸）にあたるものと考えたい。

③二ノ丸について

二ノ丸の位置を特定するには、『越中四郡古城跡略記』がまず参考になる。それによれば、二ノ丸は大手口から細く急な坂道を「十三ま（曲）がり」で登り、二ノ丸まで達するという。この「十三まがり」のことは、『三州志』にも記されており、「正門道細く、登ること十三曲にして正門に抵る」とある（傍点、筆者）。ここでいう「十三まがり」とは、現在の通称「七曲がり」付近のルートとみて、まず間違いはあるまい。とすれば、二ノ丸は別図中のA郭をさすことになろう。

規模的にみても、先の本丸＝B郭とした際に根拠と

した『越中古城記』等の東西十六間（約二九ｍ）、南北三十九間（約七０ｍ）にほぼ合致する。

④三ノ丸について

三ノ丸の位置を特定し得る文献史料は残されていないが、前述の『越中古城記』等によれば、東西十八間（約三二ｍ）、南北三十二間（約五八ｍ）とある。残るＣ・Ｄ郭の内、これに即合致するものはないが、どちらかと言えば、Ｃ郭の方が東西幅が合致し、南北がやや長いだけで、形状的にはふさわしいようである。位置的に見ても、Ｃ郭は本丸であるＢ郭の北側に隣接し、Ｋ・Ｃ・Ｂ三郭の東側を南北に走る大空堀の内側に連なる。また、北側には大規模な竪堀が西に向けて下り、西側の谷間から攻め込む敵を阻んでいる。このように、Ｃ郭は外部に直接面したＤ郭よりも防禦の面で十分に配慮されており、「三ノ丸」と呼ぶのにふさわしい郭である。

⑤城の縄張について

以上、Ｂ郭＝本丸、Ａ郭＝二ノ丸、Ｃ郭＝三ノ丸と推定した段階で、増山城全体の縄張（プラン）について考えてみよう。まず大手口となるのは、和田川対岸の城下町跡に面した西方であろう。登り道は、先に述べた「十三まがり」、すなわち現在の通称「七曲がり」にあたるとみられる。確かにＡ郭（推定・二ノ丸）の手前には、このルートに備えた土塁をめぐらしたＬ字形の細長い一郭（Ｅ郭）がある。しかし、筆者はこれとは別に、Ｅ郭北麓から登るルートもあったと考える。この方面に対する守りとしては、Ｅ郭及びＡ郭北端の堀切と竪堀がある。この竪堀の間を抜けて登ると、中腹に平坦地（Ｆ郭）が設けられている。恐らく、このルートの出入口を守る施設が置かれた所なのであろう。規模は東西三一ｍ、南北三０ｍで、低い段差によって二段に分かれている。Ｆ郭はＥ・Ａ両郭の尾根から見下ろされる位置にあり、守りは固い。このルートは七曲がりに比べ、傾斜もゆるく、登りやすい。防禦面でもＥ・Ａ両翼の尾根があり、十分に配慮されている。こうした点から、当初は七曲がりが大手のルートとされていたものに、のちにこのルートが開設・追加されたとも考えることができる。

続いて縄張の特徴を列挙してみたい。

○城域が広大なこと。主要な郭の削平も十分に行われ郭内がゆったりとして居住性もよく考慮されている。また、空堀の規模も大きく、越中三大山城の名にふ

さわしい。

○防禦は極めて厳重であり、急斜面となった西側以外は、空堀を駆使して守っている。特に南から東側にかけて、深い谷間に面して空堀を二重にめぐらしている。とりわけ、麓から六～七０ｍの比高を有するにもかかわらず、谷に面した外縁部に堀切・竪堀を一線に連ね、強固な防禦線を形成しているのには驚くばかりで、城の背後とも言えるこの方面の守りがいかに重視されていたかがわかる。

○この城の特徴の一つは、尾根の上部から一気に下る竪堀で、特にＣ・Ｋ両郭の間を東西に下る竪堀は見事なものである。こうした竪堀は、たいてい堀切と接続しており、前述の南～東側にかけては、三本の尾根を一直線に横切り、延々と伸びている。このように大規模な竪堀の存在は、越中国内でも珍しいものである。

○同時に、空堀が直線的に設けられているのも大きな特徴である。一般に中世山城は険しい地形を生かすゆえに、防禦施設はその地形に左右される。しかし、ここ増山では、あえて直線的に空堀を設けるなど、築城者の強固な意志が貫かれているようである。そこには、十分な計画性が秘められており、国内の他の城郭には見られない点である。

増山城は長期にわたって存続した城であり、このような広大な城域が一気に構築・完成されたとは考え難い。恐らく数次にわたる整備・拡充を経て現在の姿になったものと考えられる。その細かな分析は今後の課題としなければならないが、最終的に現在の姿を見せるに至ったのは、佐々氏時代から前田氏時代（十六世紀末）にかけてであろう。

註

1　『越中古城館址記』の中には、増山城について記した箇所が二カ所あり、それぞれ内容は微妙に違う。ここでは、便宜上、前に記載されている箇所をａ、後に記載されている箇所をｂとする。

（高岡）

六　「鐘撞堂」について――実測調査から――

通称「二ノ丸」の最奥部、北東隅に「鐘撞堂」と伝えられるところがある。ほぼ方台形の高まりで、北側は通称「安室屋敷」と画する空堀、東側は通称「馬洗い池」とそれに続く空堀に接しており、いずれも急峻な斜面である。南側にテラス状の面と、その面でつながり空堀にそって南へのびる土塁がある。

西側の平坦面からの高さ約六m、一段高い南側ではテラス下端からの高さが、約四・五m、上面からは約三mである。下底部の平面規模は空堀側の斜面はとらえにくいが、平坦面からのレベルでみると東西方向約二五m、南北方向はテラス部を含めて約二五mとなる。上部の平坦面では東西方向約一一m～一四m、南北方向約一一mの広さがある。この南西隅にテラス端からの幅〇・六m～〇・九mの登り道がある。ちょうどこの道を登りつめたところに約三〇㎝大の自然石が一個露頭している。他に類例が見当たらないので、建物の礎石となるか否か不明だが、自然石の少ない場所だけに、持ち込まれた可能性が高い。

「鐘撞堂」については、『越の下草』の「…本丸より北西の間に、櫓の跡也とて、本丸より猶高き処、十間四方ほとあり。……三ノ丸と見ゆる処は、猶南方にて、時鐘台の跡とて、七間四方程の跡あり…」との記述にある時鐘台と関連させる見方もある。しかし、「鐘撞堂」は増山城域では最も高い位置にあり、他の方位、位置関係からも、この記述とは相違点が多い。むしろ、土塁に連続することや、交差する空堀の一角にあること、他の郭からみて中枢的な位置にあることなどから、この遺構は隅櫓あるいは櫓台状施設にあっても増山城では最も重要な建物があったところと考えられる。この遺構の内容は地表面からの観察では限度があり、より明らかにするにはボーリング探索や、試掘による調査が必要である。

（西井）

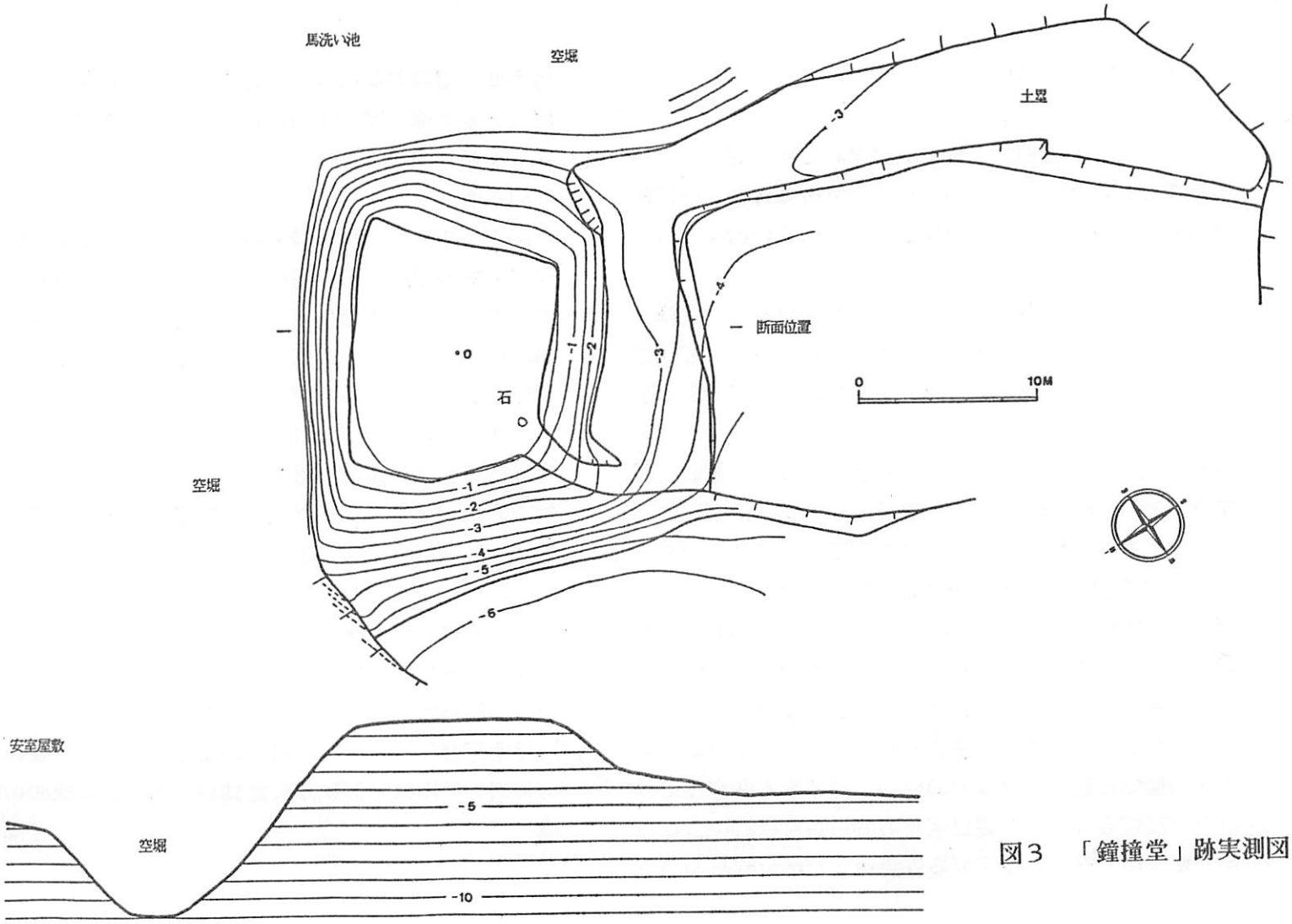


図３　「鐘撞堂」跡実測図

七　遺物について

城内及びその周辺で、遺物が表採されていたことは、以前から知られていた。ここで紹介する遺物は、今回現地調査を実施した地区内で表採されたものである。

○土器

又兵衛清水付近からは、内面はハケ目によって調整し、外面に煤が付着した黄褐色の土師器の壺（1）・内面は横ナデ、外面はヘラ削りによって調整した青灰色の珠洲焼の壺（3）、通称「一ノ丸」のヘットリ（「一ノ丸」南側斜面及び一段低くなった平坦面）からは、褐色の越前焼の甕（4～6・8）、通称「二ノ丸」出入口付近（「二ノ丸」へ通じる土橋の南側斜面）からは、七条のおろし目が施された黄白色の越前焼のすり鉢（7）、東大手口付近（和田川ダムから城内に通じる遊歩道の西脇）からは、外面はタタキ目、内面は押圧痕を残す青灰色の珠洲焼の甕（2）がそれぞれ表採されている。

表採された土師器は古墳時代頃のものと考えられ、増山城と直接の関係はないとしても、増山城が築城されるかなり以前から、この地に人々が足を踏み入れていたことが窺える。また、増山城が築城された後の遺物として珠洲焼・越前焼がある。これらの大半は大甕・壺の胴部破片であり実年代を比定できないが、室町時代の後半のものと考えられる。

○石製品

石臼（9）・茶臼（10）がある。9は一般的に見うけられる挽き臼の上臼である。直径約二八㎝・高さ約一〇㎝を計る。下部外面には、五条の溝が不均等な間隔で刻まれている。またその面は非常に摩滅しており、かなり使用されていたことが窺える。小礫を含む石質で、桑山石と呼ばれている石材に類似しており、黄褐色を呈する。

10は二ノ丸で表採されたもので、茶臼の下臼である。直径約二九㎝・上部すり面の直径約一七㎝・全高二九㎝を計る。上部すり面の残存部はわずかであり、その分画は不明であるが、9同様かなり使用されて摩滅した二組の平行する五条の溝を確認することができる。本来ならば面を主溝によって八分画され、その間を主溝が刻まれている例が多いが、10も同様の溝を持つと考えられる。下部外面は、石材をくりぬいただけあり、工具痕をそのまま残す。石質は軟質系の砂岩で、色調は茶褐色を呈する。

（安念）

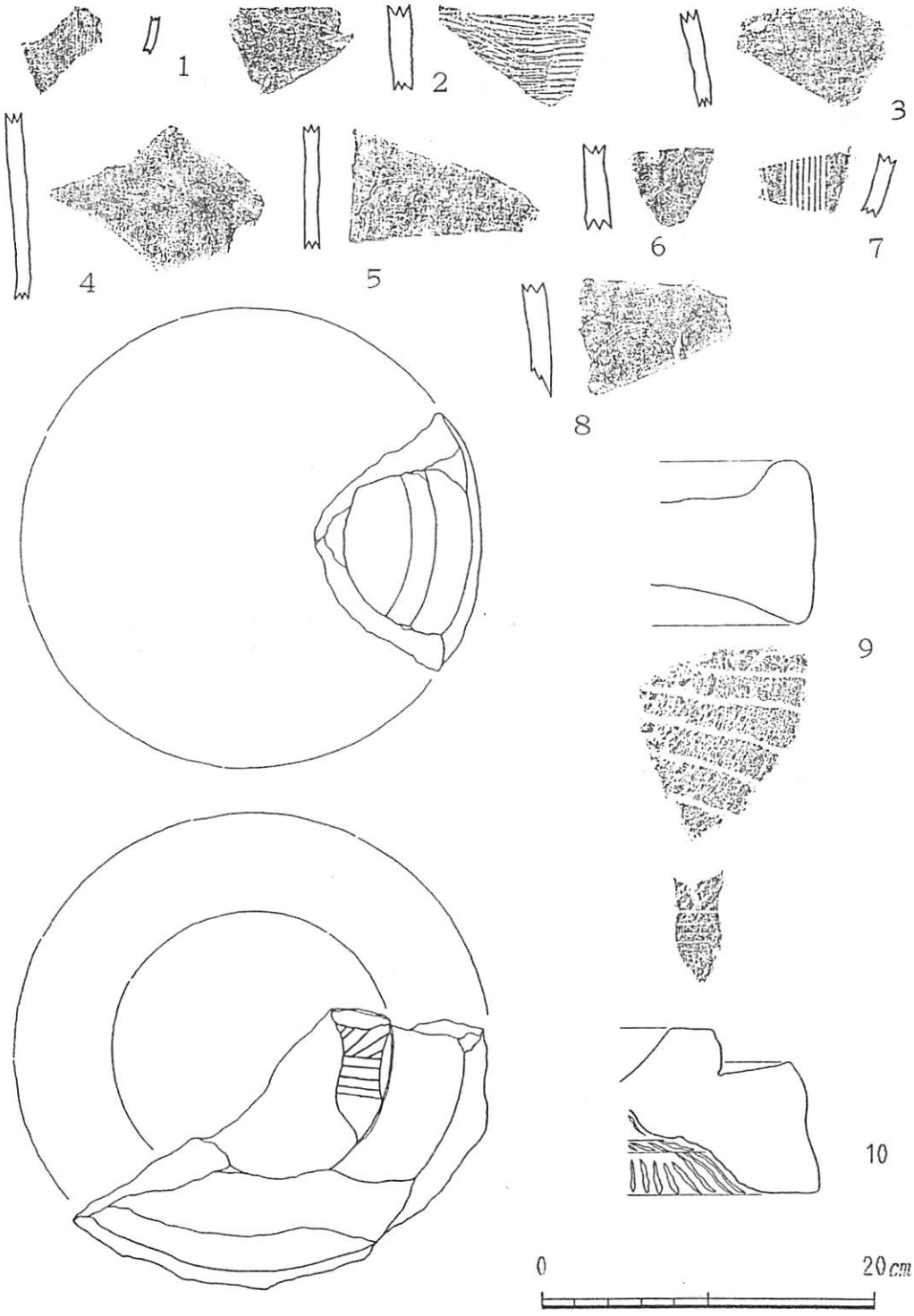


図4　増山城内で表採された遺物

八　「神水鉢」について

通称「二ノ丸」の入口からやや左へ寄ったところにある。長径一五六㎝、直交する最大幅一一四㎝の略三角形をなし、上面が平坦な自然石のほぼ中央に直径二七～二八㎝、立上り深さ二四㎝の孔が穿たれている。孔底は漏斗状にゆるく傾き、孔の中央部では直径七㎝でさらに一段深くなる。そこでは上面から二九㎝の深さがある。厚さは地中に埋没している部分が不明で全体を知りえないが、地上部から四〇㎝まで測れる。石質は輝石安山岩あるいは凝灰岩とみられる。

孔には常に水を湛えているところから、どんな旱天期でも水は決して枯れることがないといい、「神水鉢」の伝承がある。城主神保氏はこの水におとす月影で時刻を知ったとも伝えられる。

『三州志』故墟考巻之一には「…二丸中に大石あり。方人旗台と云ひ伝ふ。其の石中穴あり。（廻り一尺七寸）」と記述され、『越の下草』巻一でも、「本丸に旗台に用ひし石也とて、土より上三四尺斗、方三尺余の石あり。真中に円き穴あり。常に水ありて手水鉢の如し」とある。寸法が両者とも現状とは異なるが、「神水鉢」について述べており、その用途についてはいずれも旗台石と伝えているのである。この旗というのは、現在、砺波地方の神社祭礼にたてられる高さ一〇m近くにもなる丸太の旗棒にしつらえられる大旗を意味するのであろう。しかし、前述のように「神水鉢」の孔底には一段深い凹みがあり、旗棒台石の類例有無もさることながら、この孔の形状は旗棒を受けるものとは理解しがたい。伝承とはいえ、城主神保氏が水におとす月影を眺めたときは、すでに「神水鉢」であったのであり、さかのぼって旗棒台として用いられるべき背景もまた不明である。

そこで形状から想定されるのは、「塔心礎」である。上面が平坦であり、孔の大きさからすれば、塔の心柱を納入れした納孔であり、孔底の凹みは舎利孔と考えられる。舎利孔は造塔の主旨が舎利奉安を基調とするので、塔心礎の古い段階によくみられるが、時期、地域により変化し、新しくなるほど簡略化の傾向がみられる。石の大きさも塔心礎として遜色はない。

塔心礎に心柱の比重が大きくかかるのは、基壇が板縁となる鎌倉時代までであり、このことからすれば「神水鉢」は平安時代以前の古代の塔心礎とみてよい。

とすれば、塔心礎は本来から当地にあったのか、他よ

り搬入されたかの問題が出てくる。

増山城では同じ「二ノ丸」に「鐘撞堂」の伝承地があるが、古代寺院と関連するような遺物は未発見であり、地形的な制約からもここに寺院があったとは考えにくい。おそらく増山周辺のどこかから築城時に運び上げられたものと思われる。

（西井）

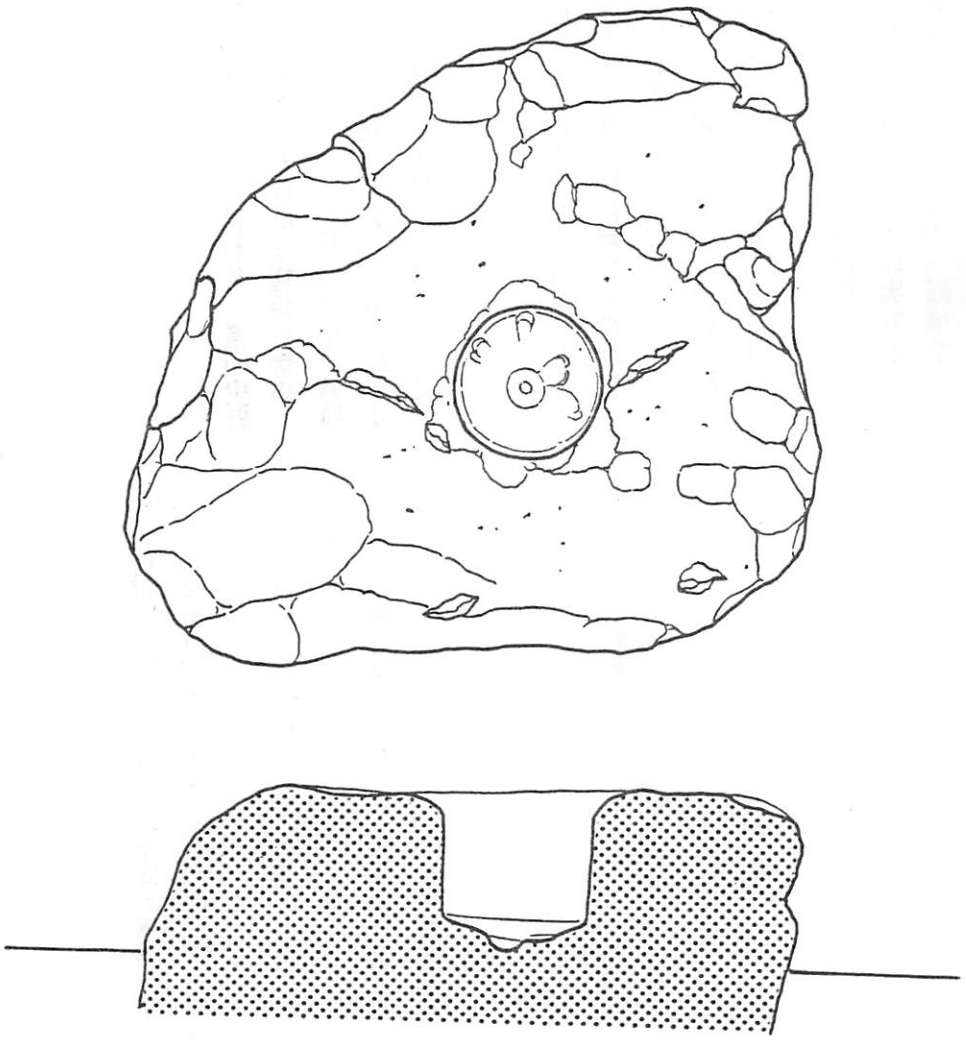


図5　「神水鉢」実測図

九　おわりに

増山城跡は、越中三大山城の一つと言われ、県の史跡にも指定されているが、これまで具体的な縄張も含め、その実態は明らかにされていなかった。特に近年、城跡に隣接する射水丘陵地域一帯の開発計画が次第に具体化する中で、城域の広がりや構造、出城の有無、さらには城下町の実態など、解明すべき課題は山積し、しかもその解明は一日を争うものとなっている。

このたび、地元の砺波郷土資料館が増山城跡一帯の調査を企画されたことは、その意味で誠に時宜を得たものであり、今こそ全力をあげて取り組まねばならないものと考える。とりあえず考古・文献・城郭の三分野の研究者からなる調査グループが結成されたのは、そのような理由による。

今回の調査によって初めて増山城の全貌が解明され、郭群を取り巻く堀切と竪堀から成る防禦線の実態が浮かび上がった。また、通称「二ノ丸」所在の「鐘撞堂」については、実測調査が初めて行われ、その性格が少しずつ明らかにされようとしている。さらに同じ郭内にあった「神水鉢」についても、古代寺院の塔心礎であることが判明した。このように今回の調査によってもたらされた諸成果は、実に大きなものであったと言わざるを得ない。

このあと、昭和六十四年度にかけて、調査はより広域化・専門化を要求されるが、できる限りの調査を行い、増山城跡一帯をふるさとの歴史的遺産として後世に残すべく努力したいと思う。今回の中間報告書は、そのささやかな第一歩であるが、また大きな一歩でもあると考えている。

昭和六十二年十月三十一日

調査グループを代表して

高岡徹

富山県指定史跡

増山城跡調査中間報告書

昭和六十二年十月三十一日

砺波郷土資料館
砺波市立砺波散村地域研究所
増山城調査グループ